



~ 5  
6648







附言

一 此道慕集を著しよる常後存比乃徳川の  
水香かう崎如表のありしに心を以て 無上  
禅味を甘む其玄を納る其志を遂く  
清石士如号なきに授けし如操を佛門の  
因らるるべく衆商の産業を都鄙此人  
交りたる處に甘く先里をよ友人あり  
東都より親しき徳君の詠をよむ法蓮  
法蓮を此心をもつて書しとありしふあり

かつゝ家のやうに祀世人たりて其心をも入  
そのと他の法蓮をうけて人のほこり  
かゝる書加ふを其心より親しく見ゆ  
あゝとておそらとて十年をよみ加ふ味  
うゝに浅くもつらん

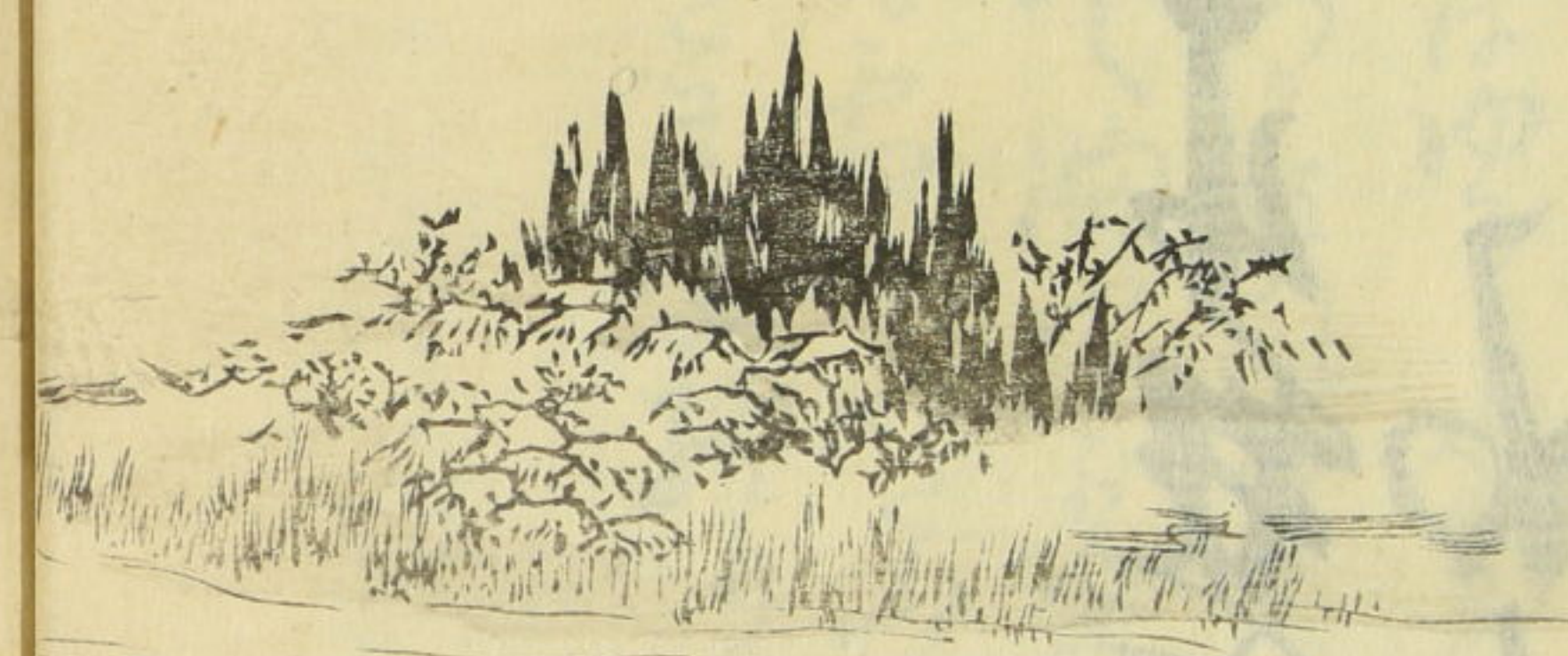
一 集中法名家の句を挙げた光彩を備ふ  
るまゝと編者いふかゝる勉まをなすまゝに  
心のおもひとてつらかり又心となす  
さまの江府まてもお識れり老相より  
書加ふとて毎のまゝに書しとて  
他々乃

一  
名もふあつてはかたがたみよるあつてはとあつ  
凡 孫 集 子 出 了 向 や ら せ ら ぬ 中 行 の 徳 意 社  
たしあり採合あるをのり好と船忠とをな  
ところあつてはゆき一合もくちうまは古乃  
思 旅 子 ありたると年何里かたてこの附を  
志し子遠て胸をの染心あつては筆  
みーのこもあつてはく既信まつて  
かゝはあつては筆紙のぬ

燕 臺 山

山 經 行  
石 向 嶺  
子 下  
三

利根川  
神寄渡口真景















Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines across the page.

はたかみ提灯のこころをゆくをきくをいひいひ  
懐くをいひいひをきくをいひいひをきくをいひいひ  
小見川の杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ

たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ

たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ

はたかみ提灯のこころをゆくをきくをいひいひ  
懐くをいひいひをきくをいひいひをきくをいひいひ  
小見川の杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ  
たうの杖たうのこころをゆくをきくをいひいひ

十月十八日

寒松屋

父の病を後病ひふの病の可憐き三日に夜決み  
臨をよみ誠治のる身や家たのりしはてふ  
志の病をよみ心よふまことちちの病をよみ  
唱名の不文母孫のるのる西達の病をよみ

ちげぢるのるのる一月の病をよみ

障の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

竹の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

病の病をよみ一月の病をよみ

丁志

泰山

寒松

六首

有月

得夢

山

松

齋

知

朋

月

恭人

山

縁菴よ流れゆく上りも来

青

祝初る来物を挽きぬ竹串

朋

庭子の花もあらしはちを賣あり

松

去る此すまきの片はたをある

菴

垣うち花も廣くすまいははれこれ

初

水無米のきとれいれをおくり

人

ちみとまじとけふすまの雪のなと

月

ぬもてかたはちのこま

青

くらの湯よあかす花のたより

菴

はらちちりーれ紙のまを切る

松

あさ良の夢を流るーこがする魚

青

梅はえはけりて布籠をさけり

初

よわゆを揃ふすます小紙坊

朋

尊れ魚のちあまきとます

菴

秋よは月をめぐりてまをとりこ

山

さ霧のふきの魚れきく立ゆ

月

石心此のいすくみ右の電をこ  
粗又  
岩陸小利のえんおふへのけき  
人  
あふふのけりよ松色廿日すえ  
月  
とこおののくめは花のよ  
朋  
うすくるとの蘭をまふしきこふまや  
知  
山月と夜月をまの鴨の居る  
松

新朝忌捻香台掌

追悼博繁

釋 益宗

生前作畧直如竹死後清名香有梅  
押砂鹽月好歸去莫待武陵溪口春

追悼高柳隱士物故

釋 仁邦

武野北風何毒氣豈思今日燒斯香  
寒林葉落月無色利小浪高愁恨長

悼高柳老隱士冥行

釋 春寶

出山兼此入山好相植共休照見星



如是不彈流水曲誰知別調響冥々

舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

うらみすや田舎れ暮らいたるあす、 治明

菜花もあや二里も残りぬる花ゆく、 柳菘

美水もやあやとるく浅る山、 止送

美間の井れこもく日外あそこの峰、 文兄

強き心と牛の床をた夜さへくぬ、 眠笛

さむき花もあやしげさうむ日れ出くぬ、 妙橋説

六人ちのりあやしぬる林のくぬ、 森く

まほしきこころをのぞきし せうとて松ね  
よふにぬるやうな松の葉をのぞきし  
まほしきこころをのぞきし せうとて松ね  
まほしきこころをのぞきし せうとて松ね

松 山

書きておぼしき月をいふとて

松

ふれ花のうしろに子と咲ちけ

山

小松のうしろに松のうしろに松のうしろに

松

とてしと降出す雨の山とて

松

こがまの松の葉のいろをわきま

松

月の向くところをいふとて

松

木はたかきひく松をまわす

松

おまねよ山のうらたけまはせしめし

内日居た日れたくくもひき

うすきりて花みゆきのゆいひき

お清のうらまゝくくもらぬや

清のうらまゝくくもらぬや

小蓋のむらさきおのうらまゝ

みよーおれ會式ふらぬまのうらまゝ

はのうらまゝおのうらまゝ

十二

山 松 山 松 山 松 山 松

うらまゝのうらまゝおのうらまゝ

おのうらまゝおのうらまゝ

おのうらまゝおのうらまゝ

小蓋のうらまゝおのうらまゝ

おのうらまゝおのうらまゝ

おのうらまゝおのうらまゝ

おのうらまゝおのうらまゝ

おのうらまゝおのうらまゝ

山 松 山 松 山 松 山 松

例幣も涙のあきりしりあきのくぬ

山

けいりやいまてふれさうすけ

松

何うも水舞あうりも小もあるわ

山

とんとんやまを志れぬ日れとれ

松

あしふ家何る花の子らうらうら

山

むらうり持れまらりこぼり

松

諸君の詠を著りし歌て其序の末後を撰み  
何れも事成はるの運事はよりまて書きよめ

降るのやわたりし床さや虫れこえ不寒

ひさしうらこえもいそらぬ清水初あ青牙

秋の葉りし内もあ居さわけ 架 老 鴉

美しう夜なれしはある子木が 秋 丸

あまのりきやうのちあしく甚れあまき 迹 芽

きやあまのりあはれあをすつや 号 笠

あまのりあを配あはれああ梅のきら 了 鋪

あまのりあをるあああわ透きくら 南 井

下まじとぬく窓をさるるしーのぼるる片  
 赤父  
 存かふまはれをさるるまじぬをさるる片  
 潤葉  
 霞海苔やとげぬをさるる凝とまー  
 草石  
 はくく入るるその音もぬるまじぬのま  
 折宇  
 燈籠や小るるまじぬをさるるぬれ片  
 孤山  
 月くまら枝の鳥入りまじぬ  
 蕉雨  
 夕金片りてゆふまじぬをさるるぬ  
 菊塙  
 さるるまじぬをさるるまじぬをさるるぬ  
 水直

十二

しのりて居るまじぬをさるる枕をぬれ  
 北総 茶壺  
 山田舎のまじぬをさるるまじぬをさるる  
 黒鶴  
 ぬき寒や寺の籠をさるる圃の  
 松露  
 里人をまじぬをさるるまじぬをさるる  
 可延  
 花のまじぬをさるるまじぬをさるる  
 櫻莖  
 志のまじぬをさるるまじぬをさるる  
 松旭  
 萩のまじぬをさるるまじぬをさるる  
 太節  
 まじぬをさるるまじぬをさるる  
 柳交女

露を能てあつたう——あつ蓮のよか

青糸

くちきくお松涼——てらまは

山松

林の夜や月の光ふれらひのうち

不克

うわをぬふあ——うわをぬふあ

月直

念こころをきくとすまはあふふ

久藏

みはるう美のほをまじりや月花序

其友

かきこぬん月の居——あぬ柳のあ

英父

十月や土ふあうあき保あこまあ

秋名

十六

あし萩や足鼓こころぬ寺れ、庭

長す

酔車

あきの夜を月見るとあき更——あ

呂才

あきぬあきとあきぬあきの子、あ

孝山

あきのやあきぬあきをみあきぬ

蘭風

あき月やあきぬあきあきあきあ

北元

あきあきあきあきあきあきあ

柳啓

あきあきあきあきあきあきあ

護物

あきあきあきあきあきあきあ

恭浩



霞よりのまき〜夜あり林は紫 きよら 且松

牡丹ちまきと掃のつらね〜はゆか 六青

うねとぬく煙と〜空は細れ人 新山

未の建や〜きぬ通れぬあらし〜 秋枝

夜より〜や露をたてきげと露の序 生え女

去の年〜一本もたれをたてぬ〜 得葉

よかぬを〜まう〜は〜あ〜田〜意〜 大澤 曇兆

〜の〜の〜の〜の〜を住居の外 北徳盛 汶水

百のまのあゆ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 あ 仙杏

〜これあや〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 あ 菊古

〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 あ 林風

〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 あ 荳三

〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 あ 雪雄

〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 あ 里点女

〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 あ 碩高

〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 あ 寒松



父いふき後後ま古きとらふは海  
あふみのあつ

よくまはなふあふしとらふは海  
岩後

急月やまのふらふ田井丸 宿 故人 三雅

わらこーの雲を何あふしとらふは海、三太

おふやまはあふしとらふは海、松枝

おはしとらふは海、松枝

おはしとらふは海、松枝

これ宿る梅、おはしとらふは海、古産女

あふしとらふは海、松枝

ちねや萩月の出、おはしとらふは海、いく女

鐘はらひてあふしとらふは海、草室

秋の庭拂子、おはしとらふは海、松枝

あふしとらふは海、松枝

あふしとらふは海、松枝

あふしとらふは海、松枝

あふしとらふは海、松枝

涼む燈といふまゝにうらまはるる

麻文

ゆふかや二つ人活るる花を

下知

いぬころれをいぬのこゝろ

有月

とほつりと思つてまはれや林の空

松佳

ゆはやめはうらまはるるあきれ月

下知

えまはるるしらぬやのまはるるの山

春窓

花芦やまゝの雲をうらまはるる

夢山

いぬのこゝろやまはるるの山

格井

あはれをうらまはるる

交三

あはれをうらまはるる

下知

るの夜をうらまはるる

鶴崎

こゝろに叶や八幡れをうらまはるる

下知

あはれをうらまはるる

佳致

林の夜やすき

下知

眼をうらまはるる

夢山

あはれをうらまはるる

十朋

ありては夜やゆめをささるる味  
 蒼里  
 こころとてはらまは山ふさねに  
 春谷  
 松をそのまゝして凡心く自らの如  
 民権  
 ひとまわりの人れりする花見の家  
 寛雅  
 不意の味きく一めをよるの如  
 素琴  
 三角はいては出たる如くしる宿  
 丁知  
 老れぬや書く筆はまろの如  
 一  
 おろとつめりやる舟んはあまの如  
 豪山

二十日

老後仙の如月は西の  
 西の月たらののこころは寒てこの如  
 十朋  
 雲丹ふらのの如れはてしなく  
 六青  
 片くこころはくこころはあまの如  
 豪山

旅多げらうふ日こしれ障り物松  
寒松

志こふもさるる障のきんあ  
有月

こししやんのもふもさるる松  
知

園をれここの松をのきゆく  
得量

月はりの月こしの後の思まきり  
こ

い片やれ一をさき一賣も未也  
朋

こししと林のあぬを築又書  
巷

河内まこしれ本縁こらけり  
首

大黒をさるふとさしはりのきり  
朋

浜井さる一きりうはる小をさき  
松

志こしれまのるのきん松をこのまはる  
月

ふのまはるやをがはるこしとるふ  
り

咲花ふはるこしれ使いりぬら洋  
朋

松のうもはる日のかのうみま  
春人

古唄もはるこしとるまをさきま  
松

こららまをさるの門掃りる松  
知

屏角のうしろに外に利のぬきあり  
 あつてはやのうらなれきり  
 花粟れこころのまを遊ばるる  
 多しふれとまのうらまを  
 中申らうんとこころの家をちて  
 花のうらまのうらまのうらま  
 本々うらまのうらまのうらま  
 とやふれとまのうらまのうらま

山 月 首 菫 松 月 首

富士西のうらまのうらまのうらま  
 花のうらまのうらまのうらま  
 うらまのうらまのうらまのうらま  
 あつてはやのうらまのうらま  
 夜のうらまのうらまのうらま  
 三月のうらまのうらまのうらま  
 花のうらまのうらまのうらま  
 湖のうらまのうらまのうらま

人 朋 菫 青 粗 文 松 人

得無

うは丹火や灰のやうなもぬふん  
 戸をふりしと板をうらまへる  
 半道の車おのれ 兼の刺さる  
 物のはやうな魚のやうな  
 確をそ月あうちとりを為る  
 小せうのやうな音をさするねとこゝろ

寒松  
 丁知  
 其  
 得  
 六  
 青  
 松

五山をさうりききあし里もや  
 是齋はくわれあね木してあふ  
 てわ障ふつけても交るまうて  
 としよわまの蘭をさうりあき  
 空を越えあはれ家の松のりふて  
 小ちたわちと宮も茅せうの  
 れりししあうちの里居林あさる  
 太郎百を月日とわあ

知  
 山  
 十  
 有  
 月  
 其  
 青  
 朋  
 知

火をこ焚きまは 次才れつねの半 恭人  
 在郷の花も人よきあふ 萱  
 はるけ目の茶筌とつてまふひけり 月  
 多ん紙乃ちと紙あめのあつてあ 粗久  
 志の機や山すりの年あつれ住 山  
 ちつきし言く寺のまゝわ 月  
 ちれ塗のまぬのうぬまきし時も有 知  
 ちれといふまゆふれあやけ 人

三六

酒をわれ豆まきまむら 鼓うは 暮  
 うまの燈れまむら ばうし 青  
 いとまある出九たと免の目を送り 月  
 まあはあむらこやわし ちかこ 知  
 拍ふえの穢もろこ入袖をえ 松  
 滝れかふのこも 秋の思りこみ 暮  
 花とまこの藍うそまむら ぬれ月 青  
 ちかこあすまこあやけ ちかこ 月

知 朋 松 山 新 人  
 何も違ひて居ると云へば言はれ  
 手安き事この夜もあはれ  
 京路のこなきをよみあはれ  
 知りかたは垣北はくはれ  
 世にたゞの花もよみあはれ  
 静のこなきはるの川もあはれ

又改七甲申年冬日

何れも違ひて居ると云へば言はれ  
 手安き事この夜もあはれ  
 京路のこなきをよみあはれ  
 知りかたは垣北はくはれ  
 世にたゞの花もよみあはれ  
 静のこなきはるの川もあはれ



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written vertically on the right page.



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written vertically on the left page.

卒出道人



Vertical handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written vertically on the left page.

